

【論文】

地中海から大西洋へ：ジェノヴァ人の
イベリア半島植民

永 沼 博 道

1. はじめに

ヨーロッパ史の上で、16世紀はしばしば大西洋時代の幕開けであり、地中海時代の終幕であると理解されてきた。ヨーロッパ経済の覇者は、中世商業の担い手であったイタリアではもはやなく、太平洋沿岸地域に重心が移り、その先頭を切ったのがポルトガル、スペインといったイベリア半島の2国民⁽¹⁾であったと見られてきた。

しかしこの見方は、国民経営の枠組みで経済の消長を捉えすぎていることにならないだろうか。中世ヨーロッパ世界経済の国民経済への分割をもたらす近代国民国家は、なお建設途上にあった。国民国家成立以前のヨーロッパ世界経済において、人と資本の移動は、より自由であった。この状況の中で

(1) ポルトガルによる香料貿易の支配は完全なものではなく、16世紀中葉におけるヴェネツィアのアレキサンドリア経由の香料貿易の復活を早くも指摘したのは、F. C. Lane である。C. M. Cipolla は17世紀初頭においてイタリアの経済活動がなお高い水準にあったことを毛織物工業によって指摘している。F. C. Lane, "The Mediterranean Spice Trade: Further Evidence of its Revival in the Sixteenth Century," *American Historical Review*, XLV (1940). C. M. Cipolla, "The Decline of Italy: the Case of a Fully Matured Economy," *The Economic History Review*, ser. 2, vol. 5 (1952). id., "The Economic Decline of Italy," in id. (ed.), *The Economic Decline of Empires*, London 1970.

は、問題はどの地域が繁栄しているかというよりは、その繁栄を支配し、その果実を受け取っていたのは誰であるのかということである。F. Braudel も指摘しているごとく、「歴史をつくるのは、地理的空間ではなく、まさしく、この空間の支配者であり創造者であるところの人間なのである。」⁽²⁾ イタリア人、とりわけジェノヴァ人はイベリア半島を經由して「ヨーロッパの拡⁽³⁾大」の果実を受け取っていた。「16世紀に地中海は、大西洋世界に対して、明かな優位を維持していた。大西洋の繁栄は地中海に恩恵を与えた。いずれにせよ、地中海は大西洋の繁栄に参加したのである。」⁽⁴⁾ その参加は、主としてジェノヴァ人を通してなされた。

ポルトガルとスペインの活動は、ジェノヴァ人の資本の技術に大きく依存していた。それでは、ジェノヴァが自らの大西洋帝国の建設を目指さなかったのはなぜであろうか。Fernández-Armesto は、その原因を一部はジェノヴァ自身にあり、一部はイベリア半島にあるとする。「ポルトガルとカスティーリャにおけるジェノヴァ人の優越的地位は、大西洋でのジェノヴァ人の活動にとって好都合な基地を提供した。ジェノヴァ人の資源への支配と、貸付にともなう利益は、ほとんどの場合、政治的支配力なしに維持されていた。ジェノヴァ人の隠べいされた植民地主義 (covert colonialism) は、カスティーリャ人が人的資源と武力を提供するという舞台装置の中で繁栄したのである。」⁽⁵⁾ 政治的分裂の結果、自らの共和国の独立すら確保できなくなっ

(2) F. Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II* (2nd éd.) Paris 1966, p. 206.

(3) P. Chaunu, *L'expansion européenne: du XIIIe au XVe siècle* (2nd. éd.), Paris, 1983. 近代世界経済は、ヨーロッパが非ヨーロッパ世界を直接的ないし間接的支配のもとに置くことによって成立した。Wallerstein 流に言えば、ヨーロッパ世界経済の全地球的規模での発展として捉えられる。I. Wallerstein, *The Modern World-System: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*, N. Y. 1974. 川北稔訳『近代世界システム』岩波書店 1981年。

(4) F. Brandel, *op. cit.*, p. 206.

(5) F. Fernández-Armesto, *Before Columbus: Exploration and Colonization*

たジェノヴァの選択の余地は、他地域の経済を間接的に支配することであった。そしてその戦略は、少なくとも17世紀初めまでは成功を見たのである。

このジェノヴァを通して、16世紀の地中海は西半球の富を支配することができた。したがって、15世紀と16世紀にイベリア人の植民活動に対するジェノヴァ人の資本と技術の貢献を明らかにすることは、この時代における地中海経済の位置づけにとって肝要なことなのである。

2. ジェノヴァ人のイベリア半島進出

中世後期イタリアの繁栄は、何よりも海運の成功によるものであった。12世紀までに東方貿易を確立したイタリア諸都市は、13世紀末にはジブラルタル海峡を越えて地中海と北海を結ぶ海洋ルートの開拓に成功していた。イタリアの有力な商人たちは、黒海から北海にいたる全海洋ルートに代理人を置いて、事業を営んでおり、大西洋ルートの開拓は、このイタリア商人の国際商業網の中にイベリア半島を組み込むことになった。

とりわけジェノヴァにとって、大西洋航路は特に重要な意味を有していた。大西洋への進出は、地中海における活動から生まれた商業上の必要によるものである。ジェノヴァの商業上の舞台は、ヴェネツィアとの競争に破れて、14世紀にはレヴァント地方及びエジプトから、エーゲ海、小アジア、黒海沿岸地方に移っていた。⁽⁶⁾それとともに、ジェノヴァ商人の交易品は、香料から、染料、綿花、明礬といった工業原料に比重を移していった。染料と明

from the Mediterranean to the Atlantic, 1229-1492, London 1987, pp. 219-220. (以下 F. Fernández-Armesto, [1987] と記す)。

- (6) 東地中海沿岸地方でのヴェネツィアとの競争に破れたジェノヴァは、黒海沿岸地方に東方での活動の場を移動させ、ジェノヴァはそこからカスピ海経由でペルシャへの接近をはかろうとしていた。同時にイベリア半島を通してヴェネツィアのアジア貿易独占に風穴を開けようとしていた。13世紀末のヴィヴァルディ兄弟による大西洋航海については、なおその詳細は不明であるが、アジア航路開拓の試みであったとされている。G. V. Scammel, *The World Emcompassed: the first European maritime empires c. 800-1650*, London 1981, pp. 162-165.

礬はフランドル毛織物工業にとって必須の原料であり、ジェノヴァの大型船は、北東地中海からジェノヴァを經由すること無しに、イベリア半島を回って北西ヨーロッパに向かったのである。⁽⁷⁾ イベリア半島南部の港はそれゆえ、ジェノヴァ船にとって重要な経由地であった。さらにイベリア産の珍しい産物は、ジェノヴァ商人の新たな交易品を提供することになった。

グラナダ王国への進出

14世紀末、東方貿易の危機のなかでイベリア半島に進出したジェノヴァ人は、まずグラナダ王国に集中した。ジェノヴァとグラナダ王国との関係の始まりは、1279年グラナダ王アブ・アブダラー・ムハマド2世 Abu-Abdallah Muhammad II とジェノヴァとの間で締結された協定に遡ることができる。この協定においては、ジェノヴァ人は、グラナダ王国領域内での保護と安全の獲得、自らのコンソリの統治下に置かれること、自らの商館、教会、パン焼きがま、公衆浴場を所有することを認められた。協定においては、さらにジェノヴァ人とアラブ人との紛争の場合の裁判権、ジェノヴァ人に義務づけられた税金、関税を免除された商品、支払いに使用される貨幣が明確に規定されていた。⁽⁸⁾

グラナダ王国でのジェノヴァ人の活動は、とりわけ南部の港湾都市マラガに集中していた。ジェノヴァ商人にとって、マラガは次のような利点を有していた。地中海と太平洋を結ぶ航路の中継港として、カステーリャ南部のカディスと並ぶ良港であった。後背地に当たるグラナダ王国が、砂糖、絹、木

(7) 拙稿「中世後期地中海海運の革新—帆船時代の到来にはたしたジェノヴァ人の役割—」神戸大学西洋経済史研究室編『ヨーロッパの展開における生活と経済』晃洋書房、1984年。及び「中世地中海海運における船の航海術の革新について」関西大学経済・政治研究所研究双書『交通経済の研究(1)』1984年。

(8) A. Boscolo, "Gli insediamenti genovesi nel sud della Spagna all'epoca di Cristoforo Colombo," in *Atti del II Convegno internazionale di studi studi colombiani*, Genova 1977, pp. 321-322. (以下 A. Boscolo, [1977] と記す)。

綿、亜麻、サフラン、香料などヨーロッパ人の異国趣味を刺激する商品を提供した。当時最も良質な皮革は、グラナダ王国産のものであった。この取引に結び付いているのはチェントゥリオネ（Centurione）一族のフィリッポ（Filippo）とその兄弟であった。彼らは、青や赤に染められた上質のラシャの輸入を手がけていた。果実類の貿易に携わっていたスピノラ家もラシャなど織物の取引を手がけていた。⁽⁹⁾

しかし、グラナダ王国への進出は、単に珍奇な産物を求めてのものだけではない。ジェノヴァのグラナダ王国進出の理由の一つは、貴金属取引にあった。南ドイツと密接な経済的関係を有し、そこから東方交易に欠かせない銀を獲得することができたヴェネツィアにたいし、ジェノヴァはこの銀を獲得する途をイベリア半島に求めた。ヨーロッパ産の繊維製品やガラス製品、あるいは塩と交換にアフリカの奥地から北アフリカ沿岸に持ち出された金は、イベリア半島に送られ、カディス、マラガ、バレンシアで銀と交換されジェノヴァに送られた。いずれの取引も仲介したのはジェノヴァ商人であり、そこから二重に利益をあげていた。⁽¹⁰⁾この貴金属取引を維持するためには、イスラム諸国との友好関係を維持することが必要であった。グラナダ王国への進出は、したがって同じイスラム教圏に属するマグレブ地方への接近を容易にするためでもあった。ポルトガル人が西アフリカ沿岸を南下しアフリカの金への接近をはかったとき、西地中海における貴金属取引の担い手であったジェノヴァ人がこれを高く評価し、深く関わった理由の一つはここにあると見られる。

ジェノヴァ人はグラナダ王国において、単に取引に携わっただけではな

(9) 14世紀中ごろマラガの砂糖は、東地中海およびシチリアの砂糖と並んで重要な地位を占めていた。J. Heers, "Le royaume de Grenade et la politique marchande de Gênes en Occident (XVe siècle)," *Le Moyen Age* LXIII (4e série, XII), 1957, p.110. (以下 J. Heers, [1957] と記す)。

(10) J. Heers, *Gênes au XVe siècle: Activité économique et problèmes sociaux*, Paris 1961, pp.66sq. (以下 J. Heers, [1961] と記す)。

い。生産活動もおこなっている。砂糖きび農園の経営、蚕の飼育、葡萄園や果樹園の経営にも携わっていた。これらは後に大西洋諸島や新大陸で展開する植民地経済の先行形態を思わせるものである。14世紀において、マラガのジェノヴァ人社会は、セビーリャ、カディスに匹敵するほどのものであった。マラガは、1487年8月カトリック両王の手に落ちたが、それに先がけて3月に教皇から、市にダメージを与えないよう異教徒との交易の許可証を受けていた。ただし1490年には、この異教徒との交易から、軍需に関係する金、銀、鉄、武器、小麦、造船用材木の取引が除外された。1489年イザベラ女王は、毎週木曜日にアラブ人であれ、キリスト教徒であれ参加できる自由市を許可し、1490年からは9月20日から10月10日までの日程で大市の開催を許可している⁽¹¹⁾。

この時期、マラガでの商業活動において第一位に地位にあったのは、ジェノヴァ人であった。その中には、アメリゴ・スピノラ (Amerigo Spinola)、マルティーノ・チェントゥリオーネ (Martino Centurione)、アゴスティーノ・イタリアーノ (Agostino Italiano) の名がみられる。パンタレオーネ・イタリアーノ (Pantaleone Italiano) は、イサベル女王の宮廷を含むスペイン全土に織物の販をしていた。また、マルティーノも女王の宮廷に上質の織物を供給していた。さらに、パンタレオーネとマルティーノは女王に個人的に融資することにより、マラガでの小麦と大麦の交易の自由を得ている⁽¹²⁾。

ポルトガルへの定住

大西洋植民にもっとも早くから乗り出したのはポルトガルであった。国土が狭く国内的に発展の余地がなく、しかもイベリア半島の西のはしに位置していた地理的条件が大いに与っていたことはもちろんである。しかし、より大きな理由はポルトガルが他に先駆けて早くから国民国家的統一を成し遂げていたからである。国民国家は、国を挙げて国富の増加をめざす国家システ

(11) A. Boscolo, [1977], p. 324.

(12) *Ibid.*, p. 325.

ムであり、その目的のため商業と海運の発展を図った。ポルトガルはそのための資本と技術をジェノヴァに求めたのである。

ポルトガル王ディニス（Diniz）はジェノヴァ人 エマニュエレ・ペサーニョ（Emanuele Pessagno）〔ポルトガル名 Manuel Pessanha〕を招き海軍の育成に当たらせた。王はポルトガル人船員を指揮するために、「海をよく知っている20人のジェノヴァ人を連れてくること」（de trager viinte homes de Genua rabedores de mar）をペサーニョに求め、提督 *admirante* の称号と職務を世襲することを認めた。彼の一族は2世紀にわたってポルトガル海軍の最も高い地位にあって、艦隊の指揮だけでなく、船舶の建造、貿易や探検にもたずさわることとなった。⁽¹³⁾

1325年から1339年の間にカナリア諸島を発見したランツァロット・マルチエツロ Lanzarotto Malocello (Marcello) もジェノヴァ人であった。15世紀ジェノヴァ人は、カーポ・ヴェルデ諸島の発見に主要な役割を果たし、後述するように、マデイラ諸島の砂糖生産の発展にとっても重要な役割を果たした。また、当初カーザ・デ・ギネー・エ・ミーナ (Casa de Guiné e Mina) と呼ばれ、ついで16世紀にはカーザ・ダ・インディア (Casa da India) と名称を変更した王立の貿易商館の代理商及び融資者としても活動している。⁽¹⁴⁾

リスボンにおいてもイタリア人居留民社会は、ポルトガル君主の好意を受け、自らのコンソリによって保護された。イタリア人は、安全通行証を受け、税と軍役を免除され、帰化の特権と武器の使用に関する特別の権利を得ていた。この特権のもと、コスモポリタンであったジェノヴァ人は、ペサーニョの例に見られるように、ポルトガルに同化していった。ポルトガルにおけるジェノヴァ人は、祖国ジェノヴァにたいして忠実であるよりは、むしろポルトガル人、大西洋人の精神で行動した。マデイラ島における砂糖生産

(13) D. Giofrè, "Le relazioni fra Genova e Madera nel I decennio del secolo XVI," *Studi Colombiani III*, 1952, p. 436. B. W. Diffie & G. D. Winius, *Foundations of the Portuguese Empire, 1415-1580*, Mineapolis 1977, p. 210.

(14) B. W. Diffie & G. D. Winius, *op. cit.*, p. 210.

は、ヴェネツィアがキプロス島を自国領土として完全に掌握したことに對する反撃であるとともに、グラナダ王国における同邦ジェノヴァ人の植民企業の打倒を目指したものである⁽¹⁵⁾。

カスティーリャにおけるジェノヴァ人

カスティーリャではジェノヴァの重要性が13世紀の中ごろから増加していった。セビーリャがキリスト教徒の手に落ちた1248年の攻略では、ジェノヴァの有力門閥のひとつであるフィエスキ家の一員であるオベルト・マンフレディ・フィエスキ (Oberto Manfredi Fieschi) が参加している。1248年セビーリャがキリスト教徒の手に落ちるとすぐさま、カスティーリャ王は、ジェノヴァ人に広範囲な特権とともに定住を認めた。1251年、ジェノヴァはフェルディナンド3世のもとに、ニコロ・カルヴォ (Nicolo Calvo) を大使として派遣し、特権を有した居留地の保有を認められた。セビーリャのジェノヴァ人居留地は二人のコンソリの統治に任せられ、居住区に自らの商館、パン焼釜、浴場の建設を許可された。ジェノヴァ人に認められたこの特権 <privilegios de la nación genovesa> は、1261年アルフォンソ3世によって再確認されるとともに、民事上の問題について王の域代 (alcadi) に訴える権利を認められた⁽¹⁶⁾。このことによりジェノヴァ人はセビーリャに確固たる立場を築く基盤を獲得した。セビーリャでジェノヴァ人が商業活動の本拠としていた場所は、今日でもジェノバ通り (Calle de Genova) の名で残っている。

再征服運動の中で建設されていった騎士の国カスティーリャは、その経済

(15) J. Heers, "Portugais et Génois au XVe siècle: la rivalité Atlantique-Méditerranée," *Actas do III Colóquio Internacional de Estudos Luso-Brasileiros, II*. Lisboa 1960, pp.143-144.

(16) L. D'Arienzo, "Mercanti italiani fra Seviglia e Lisbona nel Quattrocento," in A. Boscolo & B. Torre (ed.), *La presenza italiana in Andalusia nel Basso Medioevo*, Bologna 1986, p. 35.

活動の多くを、イタリア人、ユダヤ人などの外国商人に依存していた。なかでもジェノヴァ人の居留地は、非常に活動的であり、セビーリャ、カディスなどの港湾都市、ヘレス、コルドバなどの内陸都市でワインや小麦の取引を握っていた。

13世紀にヘレスに定住したジェノヴァ人は、あの大冒険商人ベネデット・ザッカーリア (Benedetto Zaccaria) や、ガスパロ・ディ・スピノラ (Gasparo di Spinola) のような人々であった。ザッカーリアは、カスティーリャに在住している間は商業活動を止めていた。土地の貴族と結婚し、貿易商人であるよりは、地代生活者となるのは、ヘレスやコルドバのように港の後背地に位置する中心都市に定住したジェノヴァ人の通例であった。彼らはまもなく帰化してカスティーリャの市民 (vecinos) となり、土地の貴族に列することになる。例えば、ヘレスでフランチェスコ・アドルノ (Francesco Adorno) は、市参事会員 (jurado)、そして後にはカディス侯の代理人にまでなっている。⁽¹⁷⁾

エジーディオ・ボッカネーグラ (Egidio Boccanegra) は、イベリア半島南部に定住したジェノヴァ人の典型的ケースである。彼はジェノヴァ人アルフォンソ・ボッカネーグラ (Alfonso Boccanegra) とウルラカ・フェルナンデス・デ・コルドバ (Ururaca Fernandes de Cordoba) の息子であった。彼はやがて、モゲール (Moguer) の領主であったマルティーノ・デ・ポルトカッレロ (Martino de Portocarrero) の娘にして相読人のフランチェスカと結婚することにより、モゲールの領主となった。さらにパルマ・デル・リオ (Palma del Rio) の領主になった⁽¹⁸⁾のである。

しかし、ジェノヴァや西方の商業中心地と関係を維持している大商人は、セビーリャに定着していた。1392年カスティーリャ王エンリコ3世はジェノ

(17) J. Heers, [1961], p. 490.

(18) A. Bosclo, "Genova e Spagna nei secoli XIV e XV: Una nota sugli insediamenti," in *Atti del I Convegno internazionale di studi colombiani*, Genova 1974, p. 48. (以下 A. Bosclo, [1974] と記す)。

ヴァ国民に認められた特権を確認し、ジェノヴァ人のセビーリャにおける経済的地位は確固たるものとなった。1408年当時、セビーリャのジェノヴァ商人は、ジェノヴァの海事局（*Officium maris*）の保護と監察の下にあった。⁽¹⁹⁾このような2世紀以上にわたるジェノヴァ人の浸透は、カスティール社会を商業活動に向かわすことを助けた。

14世紀には、ジブラルタル海峡を経由する北方交易が確立する一方で15世紀には東方交易の機会が一段と減少した。トルコによる1453年のコンスタンチノーブル陥落によって、ジェノヴァ人は、交易拠点であったペラを失った。このような状況のなかでイベリア半島南部へのジェノヴァ人の定住が一段と進展した。15世紀にはイタリア半島はアラゴンとフランスの争奪戦の舞台となり、政治的独立次第に失っていった。それと反比例するかのようになり、イタリア人とりわけジェノヴァ人はイベリア半島への進出を強めていった。1450年から1500年の間にジェノヴァ人の人口は、ほぼ2倍に増加した。イスラム支配下において既に9万の人口を数えたセビーリャは、カスティール王室支配下において人口減少を経験し、1500年頃には45,000人程度に半減していた。そのセビーリャが一世紀後には13,500人へと増加したのは、ジェノヴァ人流入とそれに刺激された商工業の展開、とりわけアメリカ貿易の独占⁽²⁰⁾であった。

16世紀のセビーリャは、アメリカ貿易によってスペインの最も重要な商業及び金融の中心地となったが、そのなかでセビーリャにおけるジェノヴァ人の立場は一段と強化された。対アメリカ交易こそ、この時期セビーリャにあったジェノヴァ人の最大の関心事であった。彼らは、新大陸やその他の地域との貿易についての免許を獲得し、高い地位を得、スペインの国籍を獲得した。時の法律は10年間スペインの都市に居住した者から申請に対し市民権

(19) A. Boscolo, [1977], p. 336.

(20) P. Bairoch, J. Batou, P. Chèvre (eds.), *La population de villes européennes de 800 à 1850*, Genève 1988, p. 19. ここに挙げた人口は、信頼性が高いとは言えず、あくまで一つの傾向を見るためのものである。

(21) を認めた。こうして、セビーリャの多くのジェノヴァ人が、スペインの市民権を得て、現地社会にとけ込んでいった。セビーリャのジェノヴァ商人は、長い期間の居住、結婚、市民権取得によって、カスティーリャ人社会に同化しながら、以前のカスティーリャ社会には存在しなかった新しい価値観を植え付けていった。経済的価値への高い評価がセビーリャの貴族によって受容されるようになっていった。⁽²²⁾

ジェノヴァ人は、15世紀の前半にカディスにも浸透している。それはカディスが、フランドルやイングランドへの航路の中継地として、セビーリャよりも適した条件を有していたからである。嵩高商品を輸送するジェノヴァの大型帆船は、グアダルキヴィル川を遡ってセビーリャの港に入ることはできなかった。大型船の寄港地としてはカディスは恵まれた条件を備えていた。カディスはまた砂糖の精製基地としても発展した。棒砂糖の形で送られてきたマデイラ産の砂糖はここで精製され、市場に出された。⁽²³⁾

セビーリャをスペインにおける植民地貿易の拠点とすることに大きく貢献したカサ・デ・コントラタシオン (Casa de Contratación) の創設に主要な役割をはたしたのもジェノヴァ人であった。1503年の創設に先だち、その前年フランシスコ・ピネロ (Francisco Pinelo) [イタリア名 Francesco Pinelli] によって作成されたとみられる詳細な企画書が、ポルトガルのカーザ・ダ・インディアに倣って、王立の貿易商館を設立することを呼びかけている。そこでは、アメリカとの貿易はただ一つの中央機関を通して行なわれるべきこと、使用される港は、セビーリャ一つに限られるべきことを提案している。ピネロは、ジェノヴァ人としてだけでなく、セビーリャ市民として行動して

(21) R. Pike, *Enterprise and Adventure: The Genoese in Seville and the Opening of the New World*, Ithaca 1966, p.15.

(22) しかしながら、強固に存続する貴族的精神構造がカスティーリャ社会にブルジョワ的精神構造の形成をさまたげたこともまた事実である。芝修身「近世初期のカスティーリャにおける貴族志向と経済的後進性」『スペイン史研究』3. 1985年。

(23) A. Boscolo, [1977], p. 330.

いる。この場合、彼がコロンブスの後援者であったことが、カトリック両王の信頼のもととなり、彼をしてセビーリャ市評議会の利害を代表する事を可能ならしめたと思われる。⁽²⁴⁾ピネロはまた、サンタンヘル (Lui de Santángel) と協力してイザベル女王がコロンブスに約束した国王負担分として 114 万 maravedis を融資している。⁽²⁵⁾

セビーリャで金融業を営んだ一族にセントゥリオーネ家がある。その一族の一人ガスパーレ (Gaspere) は、既に1508年にはセビーリャに定住して多くの船主や商人に融資を行っていた。アメリカ植民地向けの融資は、セビーリャでカサ・デ・コントラタシオンを通して行なわれたので、ガスパーレの事業は、カサ・デ・コントラタシオンに登録しているスペイン人との取引として為された。多くの取引はジョヴァンニ・フランチェスコ・グリマルディ (Giovanni Francesco Grimaldi) と提携して行なわれた。ジョヴァンニ・フランチェスコ・グリマルディはサント・ドミンゴとプエルトリコに代理人を有していた。その一人アントニオ・マルティン (Antonio Martin) は、植民地定住商人とジェノヴァ人銀行家との仲介行為をおこなった。⁽²⁶⁾

ガスパーレは、金融業に加えて、商品取引にも携わっていた。小麦粉、織物などを西インド諸島に供給していた。1515年には、ジョヴァンニ・フランチェスコ・グリマルディとともに、西インドからもたらされた金の延べ棒を 9,689 maravedis で購入している。⁽²⁷⁾

セビーリャにおけるジェノヴァ人の比重このように増大してくると、カスティーリャ人の妬みと反感を引き起こした。そこでジェノヴァ人は、結婚、

(24) R. Pike, *op. cit.*, p. 10.

(25) P. E. Taviani, *Cristoforo Colombo; la genesi della grande scoperta*, Novara 1982, p. 455.

(26) F. Castellano, "Un banchiere genovese a Siviglia agli inizi del XVI secolo: Gaspere Centurione," *Miscellanea di Storia Italiana e Mediterranea per Nino Lomboglia*, Collana Storica di Fonti e Studi 23, Genova 1978, p. 411-422.

(27) *Ibid.*, p. 419.

目上の帰化，二重言語，共同体や王室への貢献，名前を現地語風に綴ることにより偽装した⁽²⁸⁾。居留地で，経営上のナショナリズムに導かれた追放の脅しが現われたときには，イタリア人はいつもこのように振舞った。15世期末におけるジェノヴァ人に対する敵意のなかで，あのコロンブスも「卑しい外国人」⁽²⁹⁾と見なされた。

しかしながら，国籍を変え，現地社会にとけ込んだジェノヴァ人が，自らの母国に対する望郷の念を失ったわけではない。それに，ジェノヴァ人の商業活動は一族の家族的つながりを基盤としており，ジェノヴァを中心として北西ヨーロッパにまで広がるジェノヴァ商業世界の一員であることが，彼らの経済的成功を約束していたからでもある。国際人ジェノヴァ人は，ふたつの祖国の間で，つねに心を揺れ動かされていた。

15世紀末のリバローロ（Rivarolo）一族の主だった人々はカスティールヤに帰化していたが，ジェノヴァの館を捨てることはなかった。彼らの債務者であったコロンブスはジェノヴァの館を維持し続けることを遺言のなかで彼の相続人に命じている。しかし彼は同時に，カスティールヤに対する忠誠を生涯保ち続けるのである。⁽³⁰⁾

16世紀におけるジェノヴァ商人のスペイン王室への金融活動については，よく知られているところである。1310年のジョバンニ・デ・ビバルド（Giovanni de Vivaldo）〔イタリア姓 Vivaldi〕の場合のように，すでに14世紀からセビーリアのジェノヴァ人は，カスティールヤ王室に融資していた。15世紀末のグラナダ王国攻略のための最後の包囲戦のさなか，イサベル女王は軍資金をセビーリアのジェノヴァ人社会に求めなければならなかった。⁽³¹⁾

(28) F. Fernández-Armesto, [1987], pp. 112-113

(29) F. Fernández-Armesto, *The Canary Islands after the Conquest: the Makings of a Colonial Society in the Early Sixteenth Century*, Oxford 1982, p. 24. (以下 F. Fernández-Armesto, [1982] と記す)。

(30) *Ibid.*, p. 25.

(31) 1489年8月グラナダ包囲軍に必要な 9,315,551 maravedis の資金のためイサベル女王は彼女の宝石を担保にした。それには王冠や，フェルナンドが結婚の贈

ヨーロッパ中に広がるジェノヴァの交易網は、為替手形の流通を助けた。そのことにより彼らは国際的な銀行の役割を果たした。このことは、カルロス1世とフェリペ2世のアシエントスへのジェノヴァ人の参加を促した。ジェノヴァ人はフロス（スペイン王室公債）を引き受けることにより、スペイン王室財政を左右する力を獲得した。フロス・デ・カウシオン（*juros de caución*）〔保証証券〕からより信頼性の高い、市場においてすぐさま売却可能なフロス・デ・レスグアルド（*juros de resguardo*）〔担保証券〕に切り替えることによりジェノヴァ人は、フロスの市場を支配した。フロス・デ・レスグアルドと結びついたアシエントスによるジェノヴァの銀行家の支配を打破しようとして、1575年9月1日スペイン王は1560年11月14日以来締結された全てのアシエントスを無効にする宣言を行った。しかし、1577年12月5日にはこれを撤回する取り決めをジェノヴァ銀行家と結ばざるをえなかつた。⁽³³⁾

3. 西アフリカ沿岸諸島開発におけるジェノヴァ人の役割

イベリア半島に定着したジェノヴァ人は、イベリアの人々の植民運動の主導権を握ってしまう。Verlinden は次のように述べている。「近代植民活動の起源を研究するに当たって、一世紀以上にわたってその舞台を独占してい

物としたルビーの首飾りが含まれていた。しかし、包囲戦は長引き10月には状況が再び危機的になった。女王は寵臣 Alfonso Tellez をセビーリャに派遣して再びジェノヴァ商人から軍資金を得なければならなかった。L. D'Arienzo, *op. cit.*, p. 41.

(32) H. Lapeyre, "L'influence italiennes sur le développement économique de l'Espagne dans la seconde moitié du XVI siècle," *Aspetti della Vita Economica Medievale: Atti del Convegno di Studi nel X Anniversario della morte di Federico Melis*, Firenze 1985, pp. 257-267.

(33) カスティーリャの商人は、王室に対して十分な融資を行い得なかった。ジェノヴァの為替による低地地方の軍隊に対する金の輸送の停止は、この地での戦争の継続に支障をきたした。その結果、スペイン王室は再びジェノヴァ商人に頼らざるを得なかったのである。F. Braudel, *op. cit.*, p. 459-460.

たスペイン人とポルトガル人が、イタリア人なかでもジェノヴァ人によって蓄積された経験を利用できたということが常に思い起こされるべきである。その経験は、一般的な商業上の技術とともに、とりわけ植民地経済についても蓄積されていた。というのは、植民地経済はジェノヴァ人の地中海東岸地方や、黒海沿岸での彼らの領土において徐々に展開してきたものだからである。⁽³⁴⁾」

ポルトガルが新しい征服に乗り出した頃、まず植民地化されていったのは西アフリカ沖に位置するマデイラ群島およびカナリア諸島であった。これらの島が、そこでの植民活動において注目されるのは、近代植民地経済を特徴づけるプランテーションの展開にとって一転機を画しているためである。Verlinden は、12世紀のパレスチナにおけるイタリア人の植民活動と17世紀のアンティル諸島における砂糖きび栽培との間には、一つの連続性が存在し、ポルトガル領、及びスペイン領の大西洋諸島はその中継地点となったと主張する。⁽³⁵⁾

大西洋の諸島への植民活動が本格的に始まったとき、東地中海は活力に満ちた経済活動のモデルとともに、諸島の生態を変化させ、初期大西洋経済の基礎を作ることになる商品を提供した。それは砂糖とマルマジア葡萄であった。ギリシャ原産のマルマジア葡萄は、今日に至るまでマデイラ諸島の特産である甘口ぶどう酒の原料として、栽培されている。しかし、後にアメリカ大陸及びその所屬群島において、植民地経済を特徴づけることになるプランテーション経営のモデルを提供したのは砂糖である。⁽³⁶⁾

砂糖きびは、アラブ人によってパレスチナを含む地中海東岸地方に地方に持ち込まれた。やがて、砂糖きびの栽培は、アラブ人の支配地域に広がって

(34) C. Verlinden, "Italian Influence in Iberian Colonization," *The Hispanic American Historical Review*, Vol. 33, No. 2, 1953, p. 199. (以下 C. Verlinden, [1953] と記す)。

(35) C. Verlinden, (translated by Y. Freccero), *The Beginnings of Modern Colonization*, Ithaca 1970, p. 5. (以下 C. Verlinden, [1970] と記す)。

(36) F. Fernández-Armesto, [1987], p. 117.

いった。イベリア半島における砂糖きび栽培は9世紀に始まり、アンダルシアとグアダルキヴィル川渓谷がその中心となった。すでに1300年頃マラガの砂糖は遠くブルージュで既に売られていた。シチリアには、11世紀中ごろアラブ人によって導入され、ノルマン王朝のもとで生産が拡大していった。⁽³⁷⁾

ヨーロッパ人による砂糖生産の開始は十字軍遠征が契機となっている。十字軍の戦士たちは、当時の年代記作者が「この思いも寄らず、計り知れない天からの恵み」と書き記したところの甘味を知った。征服の後、パレスチナは西ヨーロッパ封建制のルールに従って、いくつかの領地に分割された。1123年に征服されたティール (Tyre) は、砂糖を生産していた領地の一つである。ここで砂糖生産から利益を引き出したのはヴェネツィア人であった。⁽³⁸⁾

ヨーロッパ人の砂糖に対する嗜好の拡大は、パレスチナ、ロードス島、マルタ島、クレタ島、キプロス島での砂糖きび栽培を刺激した。実際、パレスチナにおけるキリスト教国家の崩壊の後には、キプロス島が砂糖生産の中心となった。担い手はここでもヴェネツィア人であった。主として島の南部に広がっていたヴェネツィア人所有の農園は、当然のことながら、島の支配権をめぐるヴェネツィアと激しく争っていたジェノヴァ人の注意を引くこととなった。

商業的に意味のある規模でのジェノヴァ人所有の砂糖きび農園はシチリアに始まった。東地中海で失ったものを西方で取り返そうと努めていたジェノヴァにとって砂糖の生産は、高い利益を彼らにもたらしことを約束する活動の一つとして関心を引いていた。15世紀初め、ジェノヴァ人はポルトガル王国南端アルガルヴェ地方に砂糖栽培を確立しようとした。マデイラ群島、カナリア諸島の植民活動も、砂糖生産に関心を有したジェノヴァ人によって、直接的であれ、間接的であれリードされていくことになる。

エンリケ親王は1433年、ポルトガル国王ドゥアルテより、マデイラ群島の権利を与えられた。親王はこれらの島の発見に功労のあったジョアン・ゴン

(37) C. Verlinden, [1970], p. 20.

(38) *Ibid.*, p. 18.

サルヴェス・ザルコ (João Goncalves Zarco) と トゥリスタン・ヴェズ・テイシェイラ (Tristão Vaz Teixeira) 及びバルトロメウ・ペレストゥレーロ (Bartolomeu Perestrelo) をカピタン (代官) としてこれらの島の統治と利用を委託した。この統治権は事実上の封土として相続された。ポルト・サント島全体がペレストゥレーロに、マデイラ島は2分割されて、ザルコとテイシェイラにカピターノ (カピタンに統治される領域) として与えられた。

1446年に、エンリケが与えた特許状によれば、「……余は、余が王家の騎士バルトメウ・ペレストゥレーロに、余が島ポルト・サント島を、前記バルトメウ・ペレストゥレーロがそこに正義と法が維持するよう委託するものである。そして彼の死去の場合には、彼に第一子または第二子がいる場合には、その者が引き受けることを……ここに承認された方法で、さらに直系の子孫へと引き継がれることを喜びとするものである。」⁽³⁹⁾

マデイラ島はこのカピターノ・システムのもとの、経済的な発展を経験した。ヴェネツィア人航海者カダモストの記するところによれば、1455年の時点で、人口800人を数え、既に砂糖とぶどう酒の生産が成功を見ていた。「私の見るところでは、この島はチプリ (キプロス) やチチリア (シチリア) と違い、寒気の恐れがなく、高温にも達し、かつ温暖でもあるから、この植物の栽培には非常に適しているのではないか、今後もおそらく収穫は大いに上がるであろう。現に、あらゆる点で申し分のない白くて上質の精糖が多量に行なわれている。……栽培年月が浅いわりには、非常に良質の葡萄酒がとれる。その収穫量は島内での消費量を越え、輸出も多量に行なわれている。親王が植えさせた葡萄の中で特にカンディア (クレタ島にある地名) からとり寄せた種類はこの地に非常に適し、地味の豊かなことも加わって、葉よりも多く実をならせているほどである。」⁽⁴⁰⁾

(39) B. W. Diffie & G. D. Winus, *op. cit.*, pp. 302-303.

(40) カダモスト, 河島英昭, 山口昌男訳「航海の記録」, 大航海時代叢書Ⅱ, 「西アフリカ航海の記録」, 岩波書店, 1967, p. 499.

こうしてマデイラの砂糖生産は順調に成長し、1478年には、あのコロンブスがジェノヴァ人商人パオロ・ディ・ネグロ (Paole di Negro) とローディシヨ・チェントゥリオーネ (Ludisio Centurione) の名義で砂糖を積み込むためにマデイラを訪れている。⁽⁴¹⁾

マデイラ群島の砂糖きびが何処から渡来したかということについて確かなことは分かっていない。ペレイラ (Duarte Pacheco Pereira) はシチリアから砂糖きびと熟練者を招来したと記している。1478年には砂糖職人 (mestre de açúcar) ヴァレンシア人ジャメス・ティメール (James Timer) にマデイラでの特権が与えられている。バレンシアはイスラムの支配下にあるときから砂糖の生産で知られたところであった。ポルトガル本土南部アルガヴェで既に砂糖生産が試みられていたことから、ここから導入されたとも考えられる。⁽⁴²⁾

カナリア群島への最初の探検は、1336年にリスボン在住のジェノヴァ人ラツアロット・マルチェッロによって企てられたとされる。この諸島の島の一つランツァロート島はこの発見者の名をとったものであり、1339年の海図に <Marcelu> という島名で記載されている。⁽⁴³⁾ マルチェッロの探検に続いて、カナリア諸島への探検を企てたのもやはりジェノヴァ人であったと思われる。⁽⁴⁴⁾

カナリア諸島で、砂糖きび栽培が展開するようになるのは15世紀の後半に入ってからである。最初の搾汁機が出現するのは1484年のことである。16世

(41) G. Revera, *Un'impresa zuccheriera del cinquecento*, Napoli 1968, pp. 56-57.

(42) B. W. Diffie & G. D. Winius, *op. cit.*, p. 307.

(43) *Ibid.*, p. 29. P. M. Taviani, *op. cit.* p. 283.

(44) 2人のフィレンツェ商人の1341年11月15日付の手紙のことを記録した人文学者 Giovanni Boccaccio によれば、1341年ジェノヴァ人 Niccoloso da Recco とフィレンツェ人 Angiolino del Teggia dei Corbizzi に指揮された3隻のポルトガル船がカナリア諸島探検に出航した。B. W. Diffie & G. D. Winius, *op. cit.*, p. 27-28.

紀の最初の10年間に搾汁機の数は急増している。⁽⁴⁵⁾ここでもジェノヴァ商人の資本が主要な役割をはたした。当時マデイラ島の砂糖きび栽培はその能力の限界に達し、ヨーロッパ市場における需要の増加に十分対応できそうもない状況にあった。マデイラの砂糖産業に関しては、ポルトガル人商人の間に外国人排斥の動きが高まっていたことも、カナリア諸島にジェノヴァ商人の目を向けさせることにもなった。⁽⁴⁶⁾カスティーリャ風に名前を変えたジェノヴァ人がカナリア諸島に住み着いて様々な事業を行った。例えば、長年にわたり染料の独占権を請け負い、砂糖生産にまで手をのびたりベロル (Ribero) [イタリア姓 Riveroi]⁽⁴⁷⁾家がある。1499年10月には、グラン・カナリア島の総督に対し、砂糖きび栽培に適した土地の半分以上がジェノヴァ人の手中にあるとの訴えがだされ⁽⁴⁸⁾ている。

マデイラの場合と同じく、カナリア諸島においても新しい領土を発見、獲得したものに封建特権を認めることが慣行となった。新たに征服された土地は、王室の認可のもと征服者と初期の定住者にレパルティメント (repartimento) として分与するシステムは、再征服運動のなかでカスティーリャによって採用されていた方法である。大西洋の諸島での植民にあたってこの方法が採用された。カナリア諸島におけるレパルティメントは、イベリア半島の伝統と結びついているだけでなく、大西洋の彼方に新たに獲得された諸島で採られた方法の先行者でもあった。フェルナンドとイサベルは、1497年コロンブスに対し、イスパニオラの土地を移住者にその身分に応じて分与⁽⁴⁹⁾するように命じている。

(45) J. H. Galloway, *The sugar cane industry*, Cambridge 1989, p. 55.

(46) D. Giofrè, *op. cit.*, p. 442.

(47) F. Fernández-Armesto, [1987], p. 22.

(48) *Ibid.*, p. 25.

(49) *Ibid.* pp. 48-50. Verlinden は言う。「同じ慣行は、イタリアの植民手続きにおいて長い間慣行となっていた。イタリアとイベリア半島の双方における、そのような特権の条件について、新しく分析と比較を行う価値がある。」C. Verlinden, [1953], p. 204.

植民事業の多くはカンパニーによって組織された。ポルトガルの植民活動も、当初から王室独占で始まったわけではない。エンリケ親王の時代には、多くの場合イタリア人が関与していたカンパニーによって遂行された。カナリア諸島についても、1495年アロンソ・デ・ルーゴ (Alonso de Lugo) が、バルマ島の植民のために、多くのイタリア人資本家、とりわけジェノヴァ人の参加のもと、スペイン当局の承認を得て、一私的カンパニーを組織した⁽⁵⁰⁾。ところで、カンパニー・システムによる植民活動は、ジェノヴァ人がすでに長い経験を有していた。カンパニーによる企業活動は東地中海の島におけるジェノヴァの植民活動において既に使われていた方法である。小アジアに近いキオス島は、ジェノヴァ商人の共同企業であるマオーナ・ディ・キオ (Maona di Chio) によって経営された。このマオーナは持ち分譲渡可能な私的カンパニーであった。名目上行政組織の長であるポデスタはジェノヴァ当局によって任命されたが、補佐官たちはカンパニーによって任命された。キオス島経営においては国家と私的カンパニーに支配権が分裂していたのが特徴であるが、実際のところ、カンパニーの力が圧倒的であった。国家的な機能が私的な商人の団体に委託されていたのである⁽⁵¹⁾。

商人によって、組織的に国際市場向けに植民地開拓が為された大西洋諸島

(50) C. Verlinden, [1970], p.124.

(51) カンパニーに依存した植民経営、とりわけ国家的な機能を私的商人組合に委任したこと、そのカンパニーの持分が譲渡可能であったことから、マオーナ・ディ・キオが、イギリス東インド・カンパニーの先駆者であったと言われる。G. Pitarino, "Chio dei Genovesi," *Studi medievali*, 10, 1969, p. 35. もっとも、J. W. Klein が、ヨーロッパにおけるカンパニーの地中海起源を主張する R. Mantran の論文に寄せて主張している如く、16, 7世紀のオランダとイギリスの大カンパニーが地中海のカンパニーを受け継いだものであるとするには留保が必要である。P. W. Klein, "The Origins of Trading Companies," L. Blussé, F. Gastra, (eds.), *Companies and Trade*, Leiden 1981, pp.17-28. 当時イタリア商人によって結成されたカンパニーは、なお家族的結合の性格が強かった。キオス島の植民カンパニーであるマオーナ・ディ・キオもその参加者が、共通の姓を名乗り、形の上では家族の性格を有していた。

の先例を、このキオス島に見いだすことができる。ジェノヴァ商人は、キオス島において乳香、果実、ワイン、絹の生産を組織化したが、これらの商品は遠隔地の市場向けのものであった。乳香は、ジェノヴァ向け、フランス向けの船にも積み込まれたが、大半はエジプト、シリア、ブルサに向かった。ブルサではペルシャがこれを購入した。乳香は、それ自体交換貨幣として利用され、とりわけアレキサンドリアでは、胡椒を入手するのに役だった。キオス島における生産活動は、当初から国際市場での販売を想定していた。上記の商品は、そのために商人によって開発され、管理されたのである。⁽⁵²⁾

カナリア諸島には、奴隷労働に基づくプランテーションは存在しなかった。砂糖きびは、ヨーロッパ人の分益小作人によって栽培された。多くの場合、それはポルトガル人であった。黒人労働力は搾汁機のためにのみ求められ、その場合でもわずかな時間だけであった。⁽⁵³⁾ 砂糖きびを植え付け育てた砂糖きび小作人 (canavereros) は、賃金ではなく収穫物を地主と分かちあった。その分け前 (partido) の配分率は通常50%づつであって、費用は地主が負担した。搾汁機を備え付けるに十分なだけの規模をもつ農園の場合は、15人から20人の小作人を使っていたと見られる。収穫期には臨時労働者を雇用し、彼らに対しては賃金が支払われた。こういった経営方法は、後のアメリカ植民地における大量の奴隷労働を使用したプランテーション経営とは明らかに異なっている。「カナリアのシステムは、はるかに旧世界の方法を思い起こさせるものである。そして地主と労働者の間で生産物を均等配分する方法は、中世後期の北イタリアで発展し今日でもなお一部で使われている折半小作制 <mezzadria> にきわめて類似している。⁽⁵⁴⁾」

マデイラ諸島においても状況は同様である。砂糖プランテーションにおける奴隷労働のはたした役割は、小さいものであった。ごく少数の奴隷が耕作労働に携わっていた。小土地保有者は、彼の家族の助けをかりて労働してい

(52) J. Heers, [1961], p. 391.

(53) F. Fernández-Armesto, [1982], p. 202.

(54) *Ibid.* p. 85.

た。16世紀中ごろ一つの転機が訪れた。1552年ポルトガル国王は、奴隷を集めに2年毎1隻の船をギニア海岸に派遣することを砂糖きび栽培業者に対し許可している。1567年にはヴェルデ岬の市場から5年間に限り年150人の奴隷を輸入することを許可した。しかしこれらは後の奴隷貿易に比べて控えめな数字である。⁽⁵⁵⁾

* * *

マディラ、アゾレス、その他西アフリカ沖の諸島は、スペイン人やポルトガル人が、後にアメリカ大陸に通用する植民地経営を学んだ訓練場所であったと見なされてきた。たしかに、Fernández-Armesto も言うように、15世紀末と16世紀初めにカナリア諸島で形作られた植民社会は、ヨーロッパ海外植民の歴史にとって、ひとつの新しい出発点となった。そこには、様々な地域から、様々な階層の植民者が引き寄せられていった。労働力としては、原住民の奴隷化もみられたが、むしろ移住者や輸入労働力に頼っていた。住み着いた様々な人種間の通婚が見られ、新たな社会を生み出していった。従来その地に知られていなかった新しい種類の作物と栽培方法の導入が見られ、生態系を大きく変えていった。このような現象は、他の大西洋諸島及びアメリカの植民地でも展開していた。⁽⁵⁶⁾

もっとも、Verlinden が早くも指摘した如く、イベリア半島の人々が植民活動において利用したシステムが、ジェノヴァ人が東地中海で利用したシステムと同じというわけではない。かつての地中海東岸地方の植民地では、例えば十字軍国家での植民社会は、現地社会から遊離した貴族社会であった。ヨーロッパ人農民移住者も存在してはいたがごく小教であり、いくつかの入植村落で孤立していた。イタリア商人経営の砂糖きび農園においても、労働

(55) J. H. Galloway, *op. cit.*, p. 53.

(56) F. Fernández-Armesto, [1982], pp. 203-204.

力とされたのは、もっぱら現地住民であった。この場合、経済的革新に対して大きな力となっても、植民は現地の社会構造にはほとんど影響を与えなかったのである。ジェノヴァ人は、大西洋の諸島における植民に際して、彼らとともに彼らの政治制度や社会制度を持ち込んだわけではない。ジェノヴァ人は、どこにおいても現地社会にとけ込んでおり、その地の政治的支配者の保護に依存していた。ジェノヴァ人は、定住した先の人々から切り離された一国民として孤立しようとはせず、そのかわり定住先の住民の信頼を得、彼らと一体となった共同体を作り上げようと努めた。いわば「平和的浸透」政策に徹し、自らの「帝国」を形成しようとはしなかったのである。⁽⁵⁷⁾ジェノヴァ人の影響はもっぱら経済活動の領域においてであり、政治システムにおいてではなかった。しかしながら、そのジェノヴァ人の大西洋経済に対する貢献は、従来から指摘されてきている金融面での貢献にとどまらなかったのである。これまで見てきたように、ジェノヴァの人的、物的資本は、ポルトガルとスペインの船を大洋に向って航海させるだけでなく、新しく獲得された土地における生産活動に、その経済活動の能力と企業家精神によって寄与したのである。

(57) C. Verlinden, [1953], p.204. P.P. Argenti, *The Occupation of Chios by the Genoese and their administration of the islands 1346-1566*, Cambridge 1958, p.30.